

「春分の日」のきょう、読売日本交響楽団第175回東京芸術劇場マチネーシリーズへ行って来た。なぜ行ったかというプログラムがモーツァルトだったからだ。しかし私はモーツァルトなら全て行きたいというわけではない。何故なら体質に合わない演奏者の演奏を聴くと胃の具合が悪くなるからだ。それも演奏中に即反応するので、そのあいだ坐っているのが辛い。おまけに横着で遠方なら「絶対行きたい！」でなければ行かない。そんな中、今回は素敵なチラシが目をつけた。「華麗なるモーツァルト～珠玉の名曲選～」というタイトルもいいし、場所も近いし、この方たちなら聴いても大丈夫だろう、というわけで、この日は彼岸の墓参りと掛け持ちと決めた。

さて、演奏会の曲目はというと【交響曲第38番〈プラハ〉／演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉K.369／〈うるわしい恋人よ、さようなら〉K.528】【歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲／歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”／歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみを”／交響曲第35番ニ長調K.385〈ハフナー〉】であった。指揮者はジェラルド・コルステン氏。ヴァイオリン奏者として各楽団でコンサートマスターを務め、現在はオーストリアのフォアアールベルク響の首席指揮者。なんと読響と2度目の共演予定時に東日本大震災が起り、震災翌日までリハーサルをしておきながら当日キャンセルになったという経緯があり、今回は当時演奏されるはずだった曲の4年越しの披露ということであった。

ところで、どこの楽団でもどんな歌手でも演奏者でもそうなのだが、一曲目はあまり乗らず、徐々に気分が上がる。しかしその中でも一曲目どころかワンフレーズで心を掴む人がいる。その一人がきょうの演奏会でソプラノを務めたエヴァ・メイさんだ。イタリア出身で、コロラトゥーラ（Coloratura＝トリルなどの速い中に華を持たせる技巧）を得意とし、「後宮からの誘拐」のコンスタンツェ役でデビューした方だ。今回もオーケストラの演奏の一曲目は、指揮者のパワーの方がやや大きかったが、それでも歌が入った時からシャープになった。やはり触発度が大きいのだろう。今までも様々な場面で共演者効果というものを観てきたが、今回もその呼応があったと思う。

さて、今回のコロラトゥーラも見事だったが、そのスリムな身体から発する「ふくよか」で豊かな声は素晴らしかった。こういう膨らみのある声を聴くと、日本人の声は残念ながら痩せていると思う。技術的には追いついても、こればかりはヨーロッパ人と同様にはいかないと思う。そしてエヴァさんの高い声は素晴らしい。さらに低い声も見事である。そういう場面は、スポーツで体力差が否めないのと同様に、日本人は声痩せているから歌でも不利なのだろうという感情を起こさせる。但しこの場合の歌というのはクラシカル・ミュージックの分野で、ということである。歌よりも芝居要素が強いミュージカルなどでは決して劣ると思えない。しかし芝居よりも歌要素が強いオペラではやや追いつかない感がある。そしてエヴァさんの場合、動きを交えずに直立で歌っても声がかっちり芝居になっているところがすごいのだ。つまり声の中にあらゆる感情と光景が詰まっている。最もこれが出来る人は世界でも有数ののだろうけれど、それだけに、こういう歌を聴けるといっては幸せである。

そして今回のエヴァさんと同様の感覚一すなわち声の表現力で「第一声で心を掴まれた人」を思い出してみると、小森輝彦さんがいる。日本へ帰ってくると感情表現が劣化する人がほとんどなので、是非とも変わらぬご活躍を期待したい。（2015.3.21）